

第108号
2013年
6月23日

例
會
法
話

『正信偈を味わう』が終了

2005年（平成17年）の5月例会から始めました、住職法話『正信偈を味わう』シリーズが、本年の5月例会で最終回を迎えました。

満8年に渡つてのシリーズで、当初は本当に最後まで続けることができたのかと不安な面もありましたが、無事終了することができましたことに、感慨深いものがあります。

もちろん十分なお取り次ぎができたとも思えませんが、会員の皆様にとれほどお伝えできたかは自信がありませんが、常々から申し上げております通り、法話は理解をするためのものではなく、ご法味を味わう世界でありますから、少しで嬉しい限りであります。

なお、すでにご承知の通り、例会で話しした内容は会報に連載しておりますし、法輪寺のHPにも掲載致しておりますので、時々振り返つてお読み頂き、お正信偈を拝読する際に、より味わい深くお読み頂ければと願っています。

またいづれ、一まとめにした上でお読み頂くことも検討しておりますので、宜しくお願い致します。

住職 拝

住職 拝

法の友として

法輪寺門徒総代

田中 隆

風薫る初夏の訪れ、
時はながれ季節を楽し
む間もなく、もうあれ
から二年、十年かと、
このところ月日の経つ
のが、なんだか早く感
じるこの頃の私です。



梅鶯仏教壮年会も、ご住職とみなさまのおかげにより、会も年を重ねるごとに充実されて、ともに
ご縁をいただくことができ、有り
難い限りです。

私たちが誰もが到達させていただ
くことのできる、彼の岸・お浄土
に向かつて、方向を間違わないよ
うに導いてくださる、法話を聞く
ことの大切さ、そして浄土真宗の
この世界に今、生かされているこ
とは、感動でもあり、本当に有り
難いことです。

ついつい忘れてしまいがちにな
 ることが、多々ありますが、今日
 までいただいたご縁を大切に、ま
 た本気で日々の家庭生活に生かし
 てゆかなければと、自分に言い聞
 かせ、今日も一日家族皆が元気で
 あつたことに感謝をし、報恩感謝
 の日暮らしをさせて頂いているこ
 とです。・・・・隆のひとりごと

辞書には、ネット検索にはない表現の違いがあることを感じまして、たまたま梅と鶯について辞書を引きましたところ、出版社によって色々ですが、鶯という字を引きますと「経読み鳥」「人来鳥」「梅鶯」Ⅱ「仲の良いものが並んだ様」とも書かれており、その鶯は、ホトトギスの卵もあたため育て・・云々。

名付けの親様のころとは異なるかも知れませんが、『梅鶯仏教壮年会と法輪寺』その様なイメージか、又はもつと深い意味があつてのことなのか、想いを馳せるにつけ親しみもいっそう沸いてくるような、そんな思いをいたしました。これから肩を張らずに聞法に励みたいところです。

ご門主様のご消息のなかに書かれていますが、「大遠忌法要を契機にその地域に適した寺院活動や門信徒の創意工夫をこらした活動を・・・」と願っておられます。

梅鶯仏教壮年会、十周年を期に今後いくつかの楽しみも加えていただけるようで、和やかな梅鶯仏の「法の友」として末永くお誘い下さい。

合掌

合掌

題材法話

○正信偈を味わう⑬

【最終回】

弘經大士宗師等
拯濟無辺極濁惡
道俗時衆同心
唯可信斯高僧說
「お釈迦様のお説きにな
つたお経（浄土三部經）の
正意を広められた一居士」
や「宗師」と呼ばれる七高
僧の方々が、はかり知れな
い極めて汚濁と罪惡に満ち
みちた私たちを救ってくれ
ます。出家した人も在家の
人も、また、どの時代の人
々であつても、共に心を同
じにして、ただただこれら
の高僧方の教えを信じるだ
けであります」
○締めくくりの偈（うた）
いよいよ正信偈120句
の最後4句となりました。
この最後の4句は「結勸
偈」と呼ばれます。
「結勸偈」とは本文を締
めくくり（結）ながら、同
時に、人びとにこれを
を信ぜよと勧める文
のことです。
すなわち、初めの



2句には、七高僧様が現
れて、本願念仏の教えを説
き広め、私たちの衆生を救済
して下さることが述べられ
ており、後の2句には、そ
の高僧の方々の教えを信じ
て、本願の世界に歸入し、
お念仏を喜ぶ身となりまし
ようと、お勧め下さるので
す。
○正信偈を貫く味わい
分けされることは最初（会
報8号）にお話ししました。
その第一段は最初の2句
で帰敬序と呼び、最初の4
句は第二段でお釈迦様の教
えをもとに詠われ、そして
最後の第三段が七高僧の教
えに基づき喜びを詠われた
ものでした。
その意味で、最後の4句
は第三段の七高僧を締めく
くる讃偈であると言えます
が、その喜びは、とりもな
おさず弥陀本願のお念仏の
悦びに他なりませんから、
最後の4句は正信偈全体の
締めくくりの讃歌
であるとも言える
のです。
のすなわち正信偈
の120句は、弥



陀・釈迦・七高僧の順に詠
まれ、貫してきましたが、それ
一貫して私たちの必ず救う
と誓つてくださった、弥陀の
本願を讃歌する悦びの詩で
あり、その意味で、阿弥陀
さまとお釈迦様は一体であ
り、また阿弥陀様と七高僧
様とも一体であるとの味わ
いです。
このことは浄土真宗とし
てはとて大事なことで、
親鸞様は歎異抄の中で「弥
陀の本願まことにおはしま
さば、釈尊の説教虚言なる
べからず。仏説まことにお
はしまさば、善導の御釈虚
言したまはさば、善導の御
言したまはさば、善導の御
の御釈まことならば、法然
のおほせまことならんや
。法然のおほせまことなら
ば、親鸞がまふすむね、ま
たもて親鸞がまふすむね、ま
さふらふ歟。詮ずるところ
、愚身の信心におきてはか
くのまこと（阿弥陀様の本
願がまことであるから）お釈
迦様の説教や七高僧様の
の教えは誠であり、
親鸞の申すことも、
虚しくない。私、こ
の親鸞の信心とはこ
のようなものであ



る」と、明快に述べてお
られます。
はすべてを締めくくる重要
な句でもありませんから、も
う少し詳しく味わいたい
と思います。
○拯濟無辺極濁惡
「一無辺の極濁惡を拯濟し
たもう」の句ですが、これ
は「はかり知れない極めて
汚濁と罪惡に満ちみちた私
たちを救つてくれます」と
意識しました。
まず、「極濁惡」という
ことですが、仏教では末法
の時代を五つの濁った状態
として「五濁惡世」と呼び
ます。
時代は汚れ「劫濁」、人
々が誤つた思想・見解をも
つ「見濁」、煩惱が盛んに
起る「煩惱濁」、心身が
弱り苦しみが多くなる「衆
生濁」、寿命が次第に短く
なる「壽命濁」の五つの濁
です。
「極濁惡」とは随分ひど
い言い方に思えますが、よ
くよくこの五濁惡世を省み
れば、自分自身のことでは
なく、自分に気付かれます。
以下欠号 5月例会主職法話